校長室だより～燦燦～ №９３９

学校像

2024.1.6

「どんな学校にしたいですか」と聞かれることがある。担任の先生であれば「どんな学級にしたいですか」、教科担当であれば「どんな授業をしたいですか」、部活動の顧問であれば「どんな部にしたいですか」となる。

どんな学校にしたいかがむずかしい。自分の中に確固たるものがない。先輩の校長先生の話を聞く。なるほどと思う。だからと言って、しっくりとはこない。どうも、自分の中で理想の学校像のようなものが変化していく。信念はないのかと言われそうである。ないのかもしれない。そんなに自信満々にものごとを考えることはできない。ああでもない、こうでもない。このほうがいいなあ、やっぱりちがうなあ。いつもそんな感じである。だからといって、優柔不断というわけではない。判断や決断は素早い。即断即決に近い。いつも思考しているからこそ、判断もできる。

今年度の２学期はというと、「どんな学校にしたいですか」ともし聞かれたら、「働いても疲れが残らない学校にしたい」と答えていたと思う。働き方改革を進めてはいるが、まだまだ仕事は多い。だが、充実感や満足感、達成感があれば、どうであろう。

同じ苦しい仕事をしても、疲れが残る学校と残らない学校がある。それは、生徒によるだろう。生徒が生き生きと笑顔で生活するような学校であれば、先生方の疲れも、その質が変わってくる。もう一つは、仕事の大変さを理解してくれる上司がいてくれると、あまりつらくはならないのではなかろうか。したがって、校長としての役割が重要となる。

もう１０年も前から、どんな学校にしたいかを考えてきた。これだというものはない。だが、徐々にではあるが、見えてきたものがある。わかってきたような気がする。ようやくこれからというところで、理想の学校像を考える作業も終了となる。人生とは、こんなものか。

自分が勤務する学校は、自分のものではない。福島市のものであり、地域のものである。教員は風のような存在であり、いずれ去っていく。それは、校長も同じである。学校が、自分のものであれば、社訓や社是のようなものを考えるであろう。経営方針も明確に打ち出すようになる。

ところが、学校の場合、福島県教育委員会や福島市教育委員会から下りてくるものがある。それを受けて学校のことを考えている。支店のようなものか。したがって、営業方針のようなものを考えるようになる。

理想の学校像は、公立の学校には、あまりそぐわないように思う。私立の学校、あるいは高校で考えると、しっくりくる。建学の精神や校訓である。とはいっても、このまま「どんな学校にしたいですか」という問いに明確な答えを出さないままでいるのも嫌なので、この３学期には答えを出したい。